

地域資源・文化・歴史の記録と保全に関する研究

背景・目的

今年度は、学芸員課程での使用が中心となった。学芸員課程においてシンポジウムを実施するために特別講師を招聘したり、学外での活動を潤滑に進めるためにノートパソコン等も購入した。

実施内容

学芸員課程では、2年生が次年度における博物館実習受講のために提出するレポートによって実習館が決まると、そこから次年度7月に実施する講演会もしくはシンポジウムの準備を始めることになっている。これは、学芸員資格を得ようとする学生に対し、学芸員の教育普及の仕事を実際に体験させると同時に、資格取得のための意識を高めること、また、館務実習に行った際、体験させられる共同作業に慣れさせるために実施してきたもので、本学学芸員課程の特色となっている教育プログラムである。

従来は、学生に県内の諸施設を見学、取材させ、その結果に基づいてシンポジウムのテーマを考えさせてきたが、毎年、同様の訪問を行わせることについては、館との関係を保つ上に必ずしも適切ではないと考え、教員からヒントを与え、それに基づいて諸施設を見学し、話題を広げるように指導している。2015年度は、大平が気仙沼市内小学校資料調査で知己を得た気仙沼市教育委員会嘱託職員（当時）北林牧氏を大学に招いて、「インタープリテーション」という考え方について講演していただいたところ、受講生はこの考えに興味を抱き、県内諸施設の見学を行った。そして、インタープリテーションという考えから、対照的な展示方法をとる宮城県美術館、仙台市歴史民俗資料館、東北歴史博物館を選び、各館の主に普及部門を担当する学

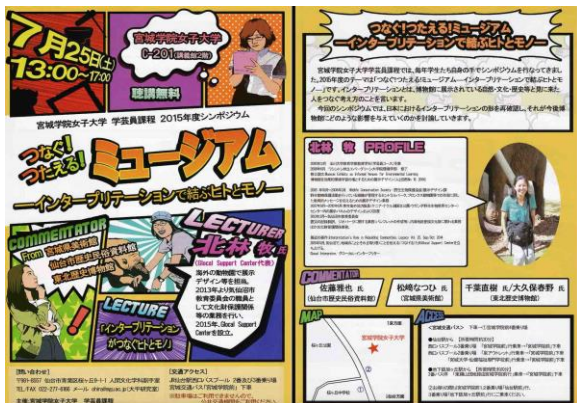
芸員にシンポジウムでのパネラーとしておいていただけるよう交渉し、北林牧氏の講演を中心とするシンポジウムの開催を決定した。

テーマは「つなぐ！つたえる！ミュージアム—インタープリテーションで結ぶヒトとモノ—」に決定し、準備が開始されたのであるが、テーマの決定が連休明けとなったため、例年より厳しい時間的制約の中での活動となった。

内容的には、パネラー間のかなり踏み込んだ討議があり、充実したものとなった。学生の取材結果に基づく発表も、それなりの水準に到達した。しかし、近年の学生の傾向として、共同作業になじめない学生が増え、意思疎通を欠くことが常態的となりつつある。中心になって活動した学生と、自分に与えられた役割についても責任感の薄い学生との差は大きい。全体を統括した執行部の学生には相当な心理的負担がかかったようであるが、社会に出た時には当然経験せざるを得ない「仕事上の人間関係」を実体験することができる機会であり、今年も執行部及び運営のための各部の責任者となった学生は、始めたころに比べると格段の社会性を身につけることができたように見える。

今後も、学芸員資格取得の重要な教育プログラムとして、また、博物館・美術館等について学びながら経験できるインターンシップとして、さらに効果のある実施方法を検討していきたい。

なお、今年度後半からは、来年度博物館実習受講生に対する指導を始めた。来年度は、本学創立130周年を記念して実施される企画に学芸員課程として協力することとなるため、井上研一郎が中心となり、取り組み始めている。



01 シンポジウム 昨年の暮れから準備を始め、冬休み、春休みをはさんでの活動は、テーマの難しさも手伝って困難の連続。このポスター、チラシも難産だったが、今までにない迫力あるデザインで注目を集めた。



02 シンポジウム 学芸員課程の三年生を中心に、学外の大学・美術館関係者や卒業生、一般の方を含む約 60 名が参加した。講演に先だって学生たちによる県内 3 館の調査報告が行われた。



03 シンポジウム 今年度の講師には、宮城県気仙沼市で多彩な地域連携活動を展開しておられる北林牧さんをお迎えした。国際経験豊かな北林さんのお話に、参加者全員が聞き入った。



04 シンポジウム コメンテーターには県内の 3 館から学芸員の方にお越しいただいた。講演内容をふまえてミュージアムの現状についての率直で活発な発言が交わされ、充実した内容となった。



05 特別講話 富弘美術館学芸員の桑原みさ子さんをお招きして星野富弘の作品の魅力と富弘美術館の活動についてお話しいただいた。2016・3・17